

## 牧師室から(2022.5.1)

以前にもこの欄で書いたことがあるが、5月1日は、フランスでは親しい人にスズランを贈る日である。シューマンの『詩人の恋』にも謳われているハイネの詩ように、5月は日本でも花が美しい時期である。最近メグ（犬）と散歩をしていると、あちこちに咲いている花が目にとまり、よく見慣れていない珍しい花がある。その名前は何かと気になっていたところ、スマホで写すとその花の名前や詳しい説明、育て方まで書いてあるアプリがあると知り、そのアプリを入手した。これから色々な花を写してその名前を知ることができて嬉しい。

確かに、世の中には雑草という草はないと喝破した人もいるが、よく見ると、雑草に見えるものも、それぞれの個性があって、不思議な感じさえする。花の名前をいちいち検索しながら歩くというのは、どうも風流人のすることではないかも知れないが、私のこの頃の小さな楽しみである。

そこで先日ふとひらめいたのだが、よく女性を花にたとえることがあるけれども、このアプリで人の顔を写したらどんな花として認識するだろうかと思い、近くにいる被写体である妻を写してみた。もしかしたらアザミかなにかの名前が出て来ればなかなか面白いな、と期待した。が、結果はやはり認識できません、ということであった。やはり機械には遊び心がない。とは言え、写した顔に、気に入らない花が表示されたら、これも大変なこととなるであろう。ばかげた遊び心である。

神学生時代に花屋でバイトをしていたことがあったので、今でも花屋の前を通ると、独特の香りがして懐かしく感じる。

花は、私たちの人生を豊かにする神さまの贈り物の一つでもあると思った。

「・・・野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」（マタイによる福音書6章28,29節）

（鈴木淳一牧師）